

研究

父親の育児に対する役割意識に関する要因とその支援方略

川上あずさ, 牛尾 禮子

〔論文要旨〕

乳幼児をもつ父親の役割意識を高める要因を明らかにし、支援方略を得ることを目的に、父親10名に対して非構造化面接調査を行った。その結果、父親の役割意識を高める要因7つと、阻害する要因4つが明らかになった。これらから育児に対する父親の役割意識を高めるための支援方略として、①父親が子どもを理解し、関わる機会を増やす。②父親同士が気持ちや体験を共有する場を作る。③父親の就業方法を工夫する。④男女共同参画意識の啓発等が示唆された。

Key words : 父親, 乳幼児, 役割意識

I. はじめに

1960年代を中心とする高度経済成長により核家族化、女性の社会進出が顕著となった今日では、父親の育児役割やそれに対する意識は変化し、社会の父親の育児役割への期待は高まってきた。2003年の「子育て支援策等に関する調査研究報告」によると、未就学児童をもつ父親の希望は、「仕事と育児を同等に重視」が51.6%と半数を超えていた¹⁾。このことは、父親自身の育児に対する役割意識の高まりを示している。

育児とは、子どもの生命を守り、心身の発達を助け、健康の増進をはかり、社会に適応できるように育てることであり²⁾、そこには父親のもつ育児役割意識が大きな影響を及ぼす。とくに乳幼児期は、人間としての人格の基盤を形成する時期であり、父親の与える影響は大きい。

父親の育児については、育児参加に影響する因子³⁾や親となる意識⁴⁾、父親の人格発達⁵⁾などについての報告があるが、その詳細は明らかにされていない。また、これらの父親に関する研究は、子どもの発達や育児に関して母親との比

較で述べられているものが多く、量的研究が多い。

筆者らは、これまでの父親の育児に関する研究において、①核家族の父親は、育児への役割分担が多くなるが、生きがい感や充実感を感じている。②父親の育児に対する「役割意識」には、「父親としての自信と目標」といった「肯定的役割意識」と「他の人に育児を任せる」のような「消極的役割意識」があることを明らかにした⁶⁾。

そこで、本研究では父親の育児に対する役割意識を「高める要因」、「阻害する要因」を明らかにし、さらに、役割意識を高めるための支援方略を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象

先に実施した父親の育児に関する質問紙調査⁶⁾で同意を得られた、乳幼児をもち、妻が就労している核家族の父親10名。年齢は23歳~48歳である。

Factors about the Role Awareness for the Child Care of Father and the Support Stratagem

[1981]

Azusa KAWAKAMI, Reiko USHIO

受付 07.11.19

兵庫大学健康科学部看護学科(研究職/看護師)

採用 08. 4. 21

別刷請求先: 川上あずさ 兵庫大学健康科学部看護学科 〒675-0195 兵庫県加古川市平岡町新在家2301

Tel : 079-427-9510 Fax : 079-427-5112

表1 父親の背景

| ケース | 父親の年齢 | 子どもの人数と年齢 |
|-----|-------|------------------|
| 1 | 37 | 13歳・10歳・1歳 |
| 2 | 24 | 1歳 |
| 3 | 27 | 5歳・3歳 |
| 4 | 23 | 7か月 |
| 5 | 26 | 2歳 |
| 6 | 41 | 19歳・11歳・8歳・5歳・2歳 |
| 7 | 35 | 1歳 |
| 8 | 36 | 5歳 |
| 9 | 48 | 2歳 |
| 10 | 33 | 7か月 |

2. 調査期間

平成18年9月～19年6月。

3. 調査方法と分析

非構造化面接調査。面接内容は、「父親として育児に参加する時の気持ち」とし、自由に語ってもらった。面接は大学の一室で行った。また、対象者の了解を得て録音し、得られたデータは逐語録に起こした。面接時間は、約60分である。

分析方法は、①逐語録から父親の育児に対する役割意識と考えられる文脈を抽出し、それをコードとした。②抽出されたコードは類似性でグループ化し、タイトルをつけ、中位カテゴリーとした。③カテゴリー間で関連しているものをまとめ、上位カテゴリーとし、「役割意識」を高める要因と阻害する要因に分類した。

この作業は、バイアスを避けるために小児看護領域の質的研究者2名の協力を得た。

4. 倫理的配慮

対象者には、研究の目的と方法を説明した。また、研究への協力は自由であること、途中で拒否できること、結果は公表するが、個人は特定しないことを説明し、同意書に署名を得た。

Ⅲ. 結 果

分析の結果は表に示す(表2, 表3)。父親の「役割意識を高める要因」として、「子どもをもつことの期待」、「子どもとの関わりが増える」、「生活を子ども中心に考える」、「子どもを理解し、心が通じる」、「子どもの人数が増える」、「家族は自分が守るという思い」、「自分自身の変化を肯定的にとらえる」の7つが見出された。

また、「役割意識を阻害する要因」として、「子どもに関わることが少ない」、「子どもの世話は母親が行うもの」、「仕事で疲労する」、「父親としての実感がもてない」の4つがあった。

Ⅳ. 考 察

1. 父親の「役割意識を高める要因」について

①「子どもをもつことの期待」は、「子どもの誕生を期待する」、「子どもとの関わりを楽しむに」などである。小野寺は、父親になる喜びと育児参加との間に有意な正の相関があったと報告しており⁷⁾、子どもが生まれることへの期待は、生活の目標をもち子どもが生まれてからの父親の「役割意識」を高めることになる。

②「子どもとの関わりが増える」は、父親がよく世話をすることは、子どものさまざまな反応を体験し、「子どもがかわいい」という対児感情をもつことにつながる。内藤は、子育て中の父親の楽しく嬉しい事象は、日常生活でのやり取りの中での自分への反応と関連していると報告している⁸⁾。子どもとの関わりが増えることで体験する肯定的な対児感情は、子育ての楽しみにつながり、意識を高める。また、この肯定的な対児感情の体験は、役割意識を高める他の要因にも効果的に作用する。

子どもとの関わりが増えるためにはまず、子どもの成長・発達過程が理解できるよう、子どもの変化の具体的な経過や、父親の役割、関わり方のポイントなどが記載された冊子を職場で配布、メールで配信するなどが必要である。筆者らの調査結果では、父親が最もよく行っている世話は「遊び」であることから⁶⁾、子どもの好む遊びの提案や、遊び場の紹介なども行い、父親と子どもがより楽しく過ごせるようにすることが効果的である。

③「生活を子ども中心に考える」は、父親は、子どもの成長発達にともない変化していく家族の課題に対して、子どもが最も良い状態におかれるよう、子どもの成長に関心をもち、健康を気遣う。このことは、子どもの将来を見通し、大切に育てようとするものである。

④「子どもを理解し、心が通じる」は、父親は、

表2 父親の「役割意識を高める要因」

| 上位カテゴリー | 中位カテゴリー | コード |
|---------------|-----------------|---|
| 子どもをもつことの期待 | 期待 | 結婚してから、子どもがほしくなった ベビーカーを押して家族で歩きたかった |
| 子どもとの関わりが増える | 子どもの世話は分担 | 子どもの世話は分担 世話は手伝うというのではなく、やって当たり前 世話の分担はしているが、比重は自分のほうが少ない 沐浴は父親という空気がある ミルクと沐浴に世話が分かれた 手が空いているほうが世話をする |
| | 状況によって世話をする | 世話には仕事に関係する 仕事から帰ってからや、休みの日にはよく遊ぶ 休みの日には寝かしつける 世話をする人がいない時はする おむつ交換には、タイミングがある 子どもが具合悪いときの世話は、そっとしておくくらい |
| | 好む世話もある | 行事には参加する 入浴はやりたい お風呂に入れるのは楽しい |
| | 子どもの生活パターンに合わせる | 子どもが生まれて、生活が変わった 子どもの生活パターンに合わせた生活になった 子どもを寝かせてから、何かをする |
| | 子どもの健康への関心 | 子どもの身体によくはないことはしない 子どもができて、たばこはベランダで吸うようになった うるさい場所には子どもは連れて行かない |
| 生活を子ども中心に考える | 子どものことが気になる | 出かける時も、子どものことが気になる 出かけていても、早く帰るようになった いい意味でも、悪い意味でも子どもが主役 考えるのは、子ども中心で、次に嫁さん 子どもがいるから、嫁さんのことが気になる |
| | 子どもの将来を考える | この子のためにどうしたらいいかと考える 引越しも子どものことを考える 子どもの進路を考えながら、保育所を考える 人見知りが多いので、保育所に行かせる 子どもの見本となりたい |
| | 子どもがかわいい | 我慢できるようになったのは子どもがかわいいから 笑ったときがかわいい 笑うようになって、反応があるとかわいい 一緒に寝たりするころから、かわいいと思うようになった パパとか、話すようになったらかわいいと思えるようになった 話すようになると、どんどんかわいくなっていくだろう |
| 子どもを理解し、心が通じる | 子どもの成長がうれしい | 保育園入園とか、成長するたびに意識はパワーアップする 子どもが立てるようになったことは、意識の変化に大きい |
| | 子どもそのものの理解 | 育ててみて、子どもってこういうものとわかってから、意識が変わった |
| | 子どもと通じ合える | 意思表示がわかる 子どもも自分の思いを理解してくれる時、子どもと通じたと感じる 寝ていたら子どもが布団をかけてくれて、通じ合えたと感じた |
| 子どもの人数が増える | 子どもの数が増える | 2人目は気持ちの持ちようが違う 子どもが生まれるたびに意識はアップする |

| 上位カテゴリー | 中位カテゴリー | コード |
|----------------|--------------|--|
| 家族は自分が守るという思い | 家族を守らないといけない | 子どもと奥さんのためにやらないといけない 今までだったらやりたい仕事を、今はやりたくない仕事でもする 俺が働いて家族を守る、責任感 父親は家族を守らないといけない 家庭をもって一人前 家族のために働いているのが生きがい 父親とは養っていくこと 充実感は家族がいること 父親とは、手伝うとか行動ではなく、精神的なもの 父親とは、頼られるもの 父親は、手伝うような行動ではなく、存在感 |
| | 自分の健康に気を遣う | 子どもが生まれてから、体調に気を遣うようになった 家族のために長生きしよう |
| | 自分の子どもという自覚 | 自分の子どもだから |
| | 必死で育てる | 最初のうちは必死で育てる どうやって子どもを育てたらいいんだろうから始まった |
| 自身の変化を肯定的にとらえる | 世話はしないとけない | 世話はやらないといけない |
| | 妻への気遣いができる | 嫁が1人で世話するのがかわいそう 出かけてるときは、嫁さんが世話しないとけない 気にする比重は、子どもより嫁さんの方が大きい |
| | 自分の変化を感じる | 自分に対して我慢できるようになった 子どもができたなら考え方が変わる、責任感 家族を守らないといけないという意識ができた 時間やお金の使い方が我慢できるようになった |
| | 生活の変化を受け入れる | 生活が子ども中心になったがそれでいい 自由は全くといっていいほどないけどそれでいい 父親としての生活になっている |

子どもと関わることで子どもがかわいいという対児感情、子どもの成長・発達、保育園の入園といった節目、節目で子どもの成長を実感し、父親の喜びを感じる。それらの体験の積み重ねは、子どもへの理解を深める。また、子どもと心が通じ合い、子どもに慕われるという、子どもとのつながり体験は、単に子どもと言葉が通じる、子どもの反応が理解できるということを意味するのではなく、父親と子どもの二者間で情動や意図が共有されるということである⁹⁾。父親が語った「寝ていたら子どもが布団をかけてくれた」のように子どもとの間で、お互いを思いやる情動が交わされることは、父親にとって、育児に対する自信につながる。また、子どもらしいしぐさや行動は、父親に感動を与え、子どもへの愛おしさが増す。このためにも、先に述べた子どもとの関わりが増えるための対策が必要で

ある。

- ⑤ 「子どもの人数が増える」は、子どもの誕生による感動の体験や、子どもへの期待、子どもとの関わりやすさが増すことになる。また、育児の経験を積み重ねることによって、子育てに余裕を感じることは、「役割意識」の高まりにつながる。
- ⑥ 「家族は自分が守るという思い」については、日本の父親の多くは、経済的役割を担っており、調査対象の父親もそのことを重視していた。父親が語った「俺が働いて家族を守る」、「父親とは養っていくこと」という言葉はそれを意味している。また、守るという意識は、「父親とは、頼られるもの」というように経済面だけでなく精神面の支えになることでもある。さらに、「体調に気を遣うようになった」と話しているように、家族を守るために自分の健康に関心をもつことにもつな

表3 父親の「役割意識を阻害する要因」

| 上位カテゴリー | 中位カテゴリー | コード |
|-------------------|----------------|---|
| 子どもに関わる ことが少ない | 世話のタイミングが合わない | 夜は、自分が寝ていて子どもの世話ができない 仕事から帰って来たら、子どもは寝ている |
| | 他に世話をする人がいる | お母さんと寝ているから寝かしつけはしない |
| | 子どもが父親以外の世話を好む | 子どもが着替えを手伝わせない |
| | 世話の方法がわからない | どうして遊んでいいかわからない 服のある場所や何を着せたらいいかわからない |
| 子どもの世話は母親が行うもの | 子どもの世話は母親 | 子どもの世話は母親がするものというのがある お母さんは家にいる方がいい 父親が働いて母親が家庭を守るというイメージがある |
| 仕事で疲労する | めんどろ・疲れる | 疲れて、世話がめんどろになる 疲れた時は、世話を頼みたくなる |
| 父親としての実感がもてない | 父親としての実感がわからない | 子どもができたときは微妙 子どもが生まれた初めは、あやふやでなんとも思っていない 妊娠中子どものことは、一切関心がなかった 生まれた時、父親になった実感はわからなかった 生まれてからも微妙、変な感じ 父親の実感はまだ少ない 父親として未熟 |

がり、この意識は父親としての行動に対して責任感を高めることになる。

さらに、子どもを「必死で育てた」と語っているが、このことは、育児を成し遂げたという達成感である。父親のこの言葉は、子どもの成長によって変化する生活をコントロールし、適切な関わりを作り出し実践するという体験の積み重ねを振り返ったものであるといえる。

- ⑦ 「自分自身の変化を肯定的にとらえる」は、「自分の内面の変化を認める」、「生活の変化を受け入れる」などであり、これは人格面の変化であるといえ、父親の「人格の成長」を示すものである¹⁰⁾。父親は、人間としての成長を感じ、父親であることに喜びを感じる。このことも父親としての体験を積み重ねることによって得られると考えられるが、この変化を実感するためには、父親同士が体験や感情を共有する機会が必要である。「子育てサークル」は、父親同士の情報交換や子育てを賞賛される機会となり、その設定が必要となる。

2. 父親の「役割意識を阻害する要因」について

- ① 「子どもと関わるが少ない」ことは、肯定的な対児感情の体験が少ないことを意味し、「役割意識」を阻害すると考える。父親が、「仕事から帰って来たら、子どもは寝ている」と語っているように、就業時間が長いことにより子どもとの関わりが少なくなる。日本人の父親の育児、家事時間は、1日48分と諸外国に比べて著しく短く¹¹⁾長時間労働が常態化している。子育て世代は働き盛りでもあり、社会的役割の期待も高いことが、子どもに対して関わるが少ないことに影響を及ぼしている。
- ② 「子どもの世話は母親が行うもの」については、父親の育児での感情や関心が、子どもの特性や子どもとの関係性といった社会的側面に向いていることや⁸⁾、父親が語った「父親が働いて母親が家庭を守るというイメージがある」という言葉からも、わが国の固定的な役割分担意識の影響を受けた、子育ての主体は母親であるという意識が影響していると考えられる。妻が就業し、役割分担の状況が変化している実態の中でこの意識をもち続け

ていることは、父親にとっても葛藤があると考える。このことには、男女共同参画の啓発活動による意識の改善が必要であるといえる。さらに、父親が子育てを仕事と同様に大切であると実感できることが重要である。これらについても、子どもとの関わりを増やし、子どもへの肯定的な対児感情をもつことが重要であり、子どもの成長による変化の理解や、遊びや遊び場の紹介が子どもとの関わりを促進させ、意識の改善につながると考える。

- ③ 「仕事で疲労する」については、就業時間との関連が強い。先に述べた長時間労働の常態化は、身体的にも精神的にも疲労を招き、「仕事で疲れて、子どもの世話が面倒になる」という状況になるといえる。身体的疲労は、父親の生活の質も低下させることになり、子どもへの関わりも不安定となる。このためには、労働時間の短縮という、企業や職場の認識が必要である。政府は、少子化対策として、「男性の働き方を見直そう」という提案をし、男性の育児休業利用促進に力を入れている。「フレックスタイム」や「在宅勤務」の導入などと併せ、企業の取り組みが必要である。

また、核家族や共働きの家族形態は、今後増加すると考えられる。そのためには、家族全体を地域で支援する、「子育てサロン」、「子育て優待カード」、「子育て応援パスポート」の企画運営なども欠かせない。

- ④ 「父親としての実感がもてない」は、女性は妊娠することで身体的な変化を体験し、それによって母性意識が発達していくが、男性は育児を通して父性意識を獲得することとなり、親性の獲得に時期のズレがあるといわれている¹²⁾。父親が語った「子どもが生まれた時、父親になった実感はわからなかった」や、「生まれてからも変な感じ」という言葉はこのことを示している。父親としての実感がもてないことは、子どもに対しての愛着がわかず、育児に対する役割意識が低下すると考えられる。久坂らは、親意識を育てるために、妊娠期の養護性イメージや活動性・生命力といった子どもイメージを高める働きかけの重要性を指摘している¹³⁾。検診時に父親の同行を積極的に勧め、子どもの成長・発達につい

て丁寧に説明する。母子手帳を父親を含めた「親子手帳」に変更している市町村や、「父子手帳」を作成する動きがあるが、このことも父親にとって、子どもに対する関心を高めることにつながる。

さらに、父親と子どもの心が通じる体験を育むことが重要である。そのためには、子どもとの関わりが増えることが前提であるが、心が通じる体験を表現することが重要であり、父親同士が、子どもに抱く感情について話題がもてるような「子育てサークル」への参加は効果的であると考えられる。

3. 父親の「役割意識」を高めるための支援

これまでに明らかとなった父親の育児に対する役割意識の要因から、支援方略を図1に示した。

これらの要因は、子どもと関わることで感じる感動や肯定的対児感情、子どもと心が通じるといった「情緒的要因」、自分自身の肯定的変化の体験や、家族を自分が守っているというような「体験の積み重ね要因」、さらに仕事で疲労するというような「生活環境的要因」、子どもの世話は母親という「日本の伝統的な役割分担意識要因」に分けることができた。これらの要因は、子どもとの関わりによって得られる肯定的な感情「情緒的要因」が家族を守るという意識を強化したり、自身の肯定的変化を実感する体験、「体験の積み重ね要因」に影響するように、相互に影響し合う関係となる。

また、役割意識を「高める要因」と、「阻害する要因」も相反するものではなく、父親としての実感の高まりによって、子どもとの関わりが増えると考えられることから、相互に影響する関係にある。

父親が「育児に対する役割意識を高める」ことは父親としての役割遂行のために重要である。そのためには、子どもと関わる機会を増やすことで、父親が子どもをかわいい・愛おしいという感情、子育ての尊さを実感するという、情緒的要因の高まり。子育てを通して父親としての喜びや、子育てによって自分が成長したという体験の積み重ね、それらを支援する職場や地域のサポート等の環境的要因が重要である。

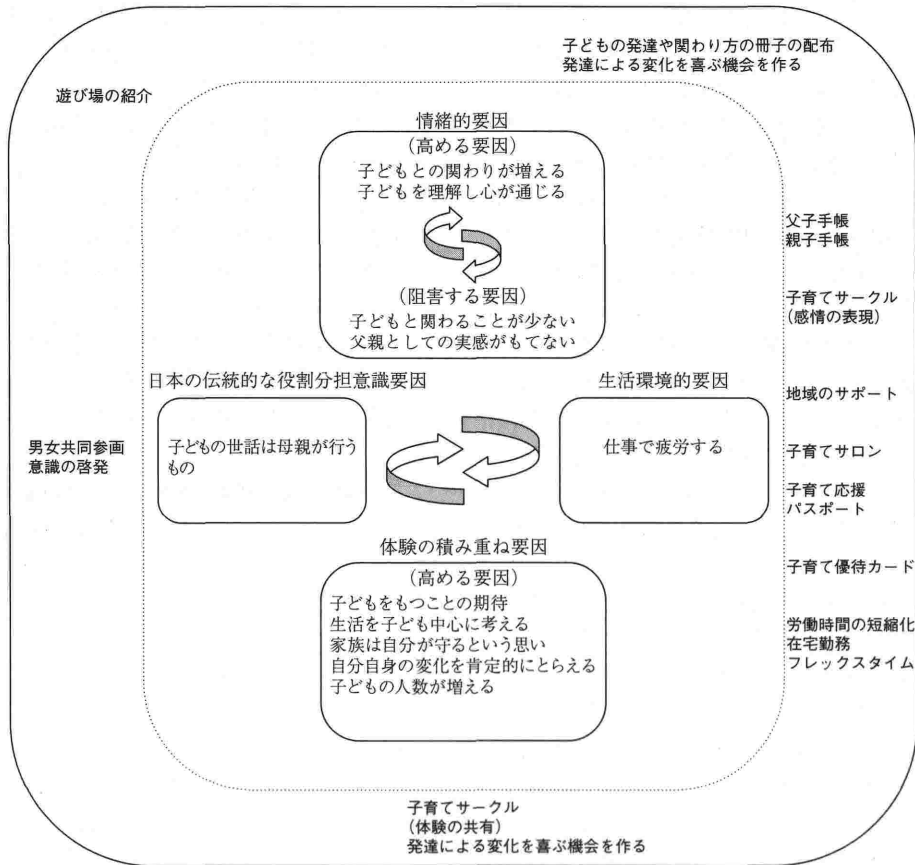


図1 父親の育児に対する役割意識を高めるための支援方略

それらの相互作用によって、さらに育児に対する役割意識を高めることになる。

V. おわりに

本研究では、父親の役割意識の要因を明らかにし、父親支援の方略を提出した。面接調査によって、父親の具体的な意識や要因が明らかになり、支援の方向付けはできた。しかし、対象数が少ないために、今後対象数を増やしていく必要がある。さらに、父親の「役割意識」は、子どもの成長にともなう課題の変化、家族の状況によっても影響を受けると考えられる。今回の研究では、子どもと父親の関わりを中心に研究を進めたが、子どもの発達や、生活環境も検討課題として残った。

文 献

- 1) UFJ 総合研究所. 子育て支援策等に関する調査研究報告書. 2003 : 23.
- 2) 川井 尚. 父子関係研究の今後の課題. 周産期医学 1990 ; 20 : 538-541.
- 3) 藤原千恵子, 日隈ふみ子, 石井京子. 父親の育児家事行動に関する縦断的研究. 小児保健研究 1997 ; 56 (6) : 794-800.
- 4) 佐々木くみ子, 植田 彩, 鈴木康江, 他. 親となる意識の構造とその影響要因に関する調査研究. 米子医誌 J2004 ; 55 : 142-150.
- 5) 目良秋子. 父親と母親の子育てによる人格発達. 発達研究 2001 ; 16.
- 6) 川上あずさ, 牛尾禮子. 父親の育児への参加状況と育児に対する意識に関する研究. 日本看護福祉学会誌 2007 ; 12 (2) : 103-114.
- 7) 小野寺敦子, 青木紀久代, 小山真弓. 父親になる意識の形成過程. 発達心理学研究 1998 ; 9(2) : 121-130.
- 8) 内藤直子, 植村裕子, 佐原玉恵. 0～3歳児を

- もつ父親の楽しい事象と悲しい事象及び役割の研究. 香川大学看護学雑誌 2005;9 (1):7-15.
- 9) 鯨岡 峻. ひとがひとをわかるということ. 京都: ミネルヴァ書房, 2006.
- 10) 柏木恵子. 父親の発達心理学. 東京: 川島書店, 1999.
- 11) 厚生労働省. 子ども・子育て応援プラン-パンフレットデータ 2006:5.
- 12) 及川裕子. 親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討 日本ウーマンズヘルス学会誌 2005:4:81-91.
- 13) 久坂ヤス子, 澤田忠幸, 豊田ゆかり, 他. 親となる意識の形成. 愛媛県立医療技術短期大学紀要 1999:12:37-43.